

談話室

談話室

編集委員長に就任して

佐野 信雄

編集委員長 東京大学工学部教授 工博

本年 4 月から 2 年間編集委員会のお世話をする事になった。これまでのべ 10 年以上も本誌の編集に携わり、本誌分科会の主査を 2 年前に終えて編集業務は卒業したつもりでいたのですが、このたびのご依頼は心ならずもお引き受けしたしだいである。

さて、その後金属学会の編集のお手伝いをする等、本誌あるいは本会とやや距離を置いてみると、本誌の編集方針に対し客観的な見方ができるようになった。何事もそうではあるが、長い間同じ仕事をしていると、何年も前に引き継いだやり方を当然のものとして受け入れ、マンネリに陥っていたのではないかと反省でもある。

本誌は国内会員のほとんど全員に配布されているのはご承知のとおりである。多少のニュアンスは違うが本誌を面白くして欲しいという声をよく耳にする。問題は、本誌の内容が会員の中心をなす大多数の鉄鋼現場技術者の興味を十分そそめるものかどうかということである。

本年 1 月より事務局の御協力に従来の会告その他の記事を整理し、ISIJ 情報ネットワークという欄が設けられ好評をいただいているが、従来より本誌の力点が研究論文に置かれていることには疑問の余地がない。研究論文は起承転結がはっきりし、十分な考察が加えられていることが必須であるので、情報の新規性や伝達の迅速性に欠ける憾みがある。極端に言えばレフリーのついたしっかりした雑誌に研究論文を出版することによって、よりメリットを受けるのは読者ではなく著者である。この点は大学人である私自身が最も感じているところでもある。このような本誌の性格から、編集委員の構成が大学、企業を問わず研究者に偏っていることは否めない。このため委員長就任を機会に多くの技術者のニーズに応え、本誌を魅力あるものにするべく、現場からの技術記事を充実する計画を提案させていただいている。私見ではあるが、掲載区分は研究論文や ISIJ 情報ネットワークとは別だとして、内容、ページ数は「材料とプロセス」に掲載されている討論会の概要と類似のものとし、研究論文とは異なる査読をしてはどうかと考えている。これによって本協会内に設置されている共同研究会とは別に、設備、計測、制御、システム関係を含む幅広い現場技術者が気楽に研究情報を交換できる場が提供できればと思う。

この他に外見的には誌面サイズの A4 化、35 年以上続いた表紙デザインの改訂についても検討を始めてい

る。

もう一つの重要な点は、会員の平均年齢が毎年ほぼ 1 年ずつ上がっている現実に対し、特に会員誌「鉄と鋼」がどのように対処するかということである。この点についてはいろいろな方策を考えねばならないが、例えば本誌の編集の立場から現実的な提案として若い人達に力点を置き、ベテランの会員に数回にわたって教科書的講義を掲載していただいてはどうだろうか。実は若い方ばかりではなく、私自身自分の専門とは異なる分野の勉強をしたいと思う時にたいへん必要に感じている。

欧文誌の ISIJ International は従来より純粋な学術誌の性格が強い。一方海外におけるわが国の最新鉄鋼技術情報に対する需要に、欧文誌がどのように応えるかという問題が提起されている。このため、前述の「鉄と鋼」誌とは動機は異なるが、簡単な技術報告の記事を掲載することを検討する必要があるように思う。従来本誌の品格を損なわずにわが国の技術開発の広報活動することは、本協会の使命の一つであろう。しかし、現実には投稿者と編集側の双方にとって、たとえ短い文章でも英文で掲載することに対する技術的問題点があるので、「鉄と鋼」で同種の記事をなるべく早く定着させた後に検討してはどうかと思う。

現在、鉄鋼分野以外のいわゆる萌芽境界領域をどのように発展させるかが本協会全体で検討されているので、その結果を踏まえて周辺分野とコア分野双方にバランスよく気を配りつつ、本会誌が会員全員の方々にとって魅力ある雑誌であるよう微力を尽くしていきたいと思う。

「太陽の化石・石炭」執筆雑感

西岡 邦彦

住友金属工業(株)鉄鋼技術研究所研究主幹 工博

1990 年 10 月、「太陽の化石・石炭」[アグネ技術センター]を出版したことから、本編集委より執筆余話と合わせ、コークス技術史を随想風にまとめてほしいとの依頼を受けた。多少の躊躇はあったが、21 世紀を間近に控え一人でも多くの方々に、石炭・コークスに関するご理解とご支援を得る良い機会と思い、本著の執筆意図に沿って以下に雑文をあえてまとめた。

1. 石炭エネルギー問題あれこれ

鉄鋼業に身を置くようになって約 20 年が経った。この間日本経済は 2 度の石油危機を経験しながらも、大きく飛躍した。ただ飛躍しただけでなく、重厚長大型の産業構造から軽薄短小型の産業構造へと変貌し、エネルギー多消費型産業は敬遠されるようになった。重厚長大